松下忠氏は元大分県水泳連盟顧問をされていましたが、現在は湯布院に健在で百一歳。佐伯史談会木許博先生より紹介があり本号に採録しました。亀川の旅館など関連情報がありましたら湯布院町川上四六三―一　甲斐晶子さんまでご一報下さい。

（研修部）

伊藤博文公亀川逗留の史実を探る

松下　忠

「三畳横眠聞無事」（三番横に眠って無事を聞く）と大書した軸が我が家にある。紛れも無く伊藤博文公の書である。時は明治の半ば、維新の動乱ようやく治まり平和行政が国内に行き渡った頃と推定されるが、博文公が僅かな供をつれて、こっそり入湯に来られたのである。

宿泊された家は亀川の某家としておこう。公は数回別府の町に出られた模様である。乗り物は船であったと想像される。別府では然るべき料亭に於いて芸者を呼び清遊せられたのではないか。それを戯れ歌とおぼしき漢詩に作詩されたのではなかろうか。前掲の七文字は、七言絶句の中の一行だけを抽出されたもののようである。

さてこの七文字の意味であるが、芸者を上げて遊ぶ費用を花代と言うが、その時間の計時用として、太い特別な線香を用いたようである。たとえば一本が燃えつきると一番、三本が燃えつきる時間を三番と言ったのだと思う。

遊興仮眠三番から目覚めた時、博文公には、若ざむらいで敵の襲撃に備えていた頃の恐怖が感覚としてよみがえる。命をねらわれる一瞬の緊張も、醒めてみると、今は身の危険など心配する必要のない平和な御代になっていることがわかる。

明治政府はこれ程までに完成している。自分達が貴い血を流して戦い、且つ努力して来た結果ではないか。自分も又威信の功臣の一人だぞと言う自負心がこの詩句の中にのぞいている。

それはさておき、何と言っても、伊藤博文公は、明治の偉大な政治家である。明治十八年に第一次伊藤内閣を組閣し、全三十三年までに四次の内閣で総理大臣となっている。

戦前のことであるが、私の父、松下信一が亀川の某家に依頼されて、その家の古文書整理のお世話をしたことがある。その際にお礼として貰ったのがこの書である。とすればその

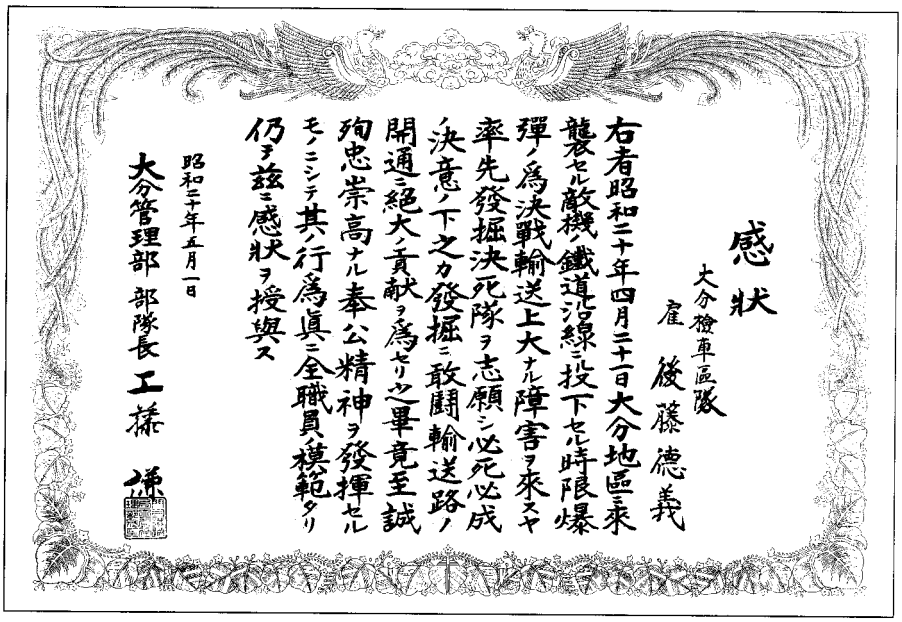
某家が博文公を泊めた家だったのであろう。父は昭和四十三年に他界したため、この家が何と言う家であったかを確かめていなかった。私はこの家をつきとめて博文公別府逗留の史実を明らかにしたい。都合でこの貴重な書を元の家に返してもと考えている。

ちなみに、井上馨侯が別府ゆかりの人物と言われるが、井上侯と伊藤博文公は、文久三年、共に密出獄して英国に渡り留学したと言う義兄弟の如き友人であった。

時限爆弾を除去した決死隊

研修部

昭和二十年三月十八日、大分・佐伯・柳浦の航空隊は、米第五八機動部隊から発進した艦上攻撃機による爆撃を受け、大きな損害を被った。これが大分県初の空襲であった。以後B29長距離爆撃機も加えたが、本土決戦まで続いた。爆撃は県下多くの市町村に及んだが、軍事輸送の幹線たる国鉄沿線には時限爆弾が多数投下され、列車の運行が阻害された。このため国鉄職員による時限爆弾除去決死隊が編成された。除去にあたった一感状一は、二十年、中等学校学徒動員で国鉄第一線現場に派遣された後藤徳義さんが、大分～南大分駅間に投下され一週間にわたり列車の運行を阻んだ時限爆弾除去に決死隊として参加し、その任務を遂行したことに対して授与された感謝状である。



感状

大分検車區隊
雇　後藤德義

右者昭和二十年四月二十日大分地區ニ來襲セル敵機ノ鐵道沿線ニ投下セル時限爆彈ノ爲決戰輸送上大ナル障害ヲ來スヤ率先發掘決死隊ヲ志願シ必死必成ノ決意ノ下之カ發掘ニ敢闘輸送路ノ開通ニ絶大ノ貢献ヲ爲セリ之畢竟至誠殉忠崇高ナル奉公精神ヲ發揮セルモノニシテ其ノ行爲眞ニ全職員模範タリ仍テ茲ニ感状ヲ授與ス

昭和二十年五月一日

大分管理部　部隊長　工藤